

「仕事ができる社員、できない社員」という本からです

仕事とプライベートをはっきり分ける人 ワーク・ライフ・バランスが「働き方」を変える

この本でもここまで何度か出てきましたが、「ワーク・ライフ・バランス」という言葉を最近よく聞くようになりました。日本語に訳せば「仕事と私生活の調和」が取れることであり、仕事にやりがいや充実感が持てる一方で、仕事以外の生活においても生き方が選択できることが、重視されるようになっています。

これに当てはめて考えるなら、仕事とプライベートが分けられる人とは、ワークとライフの間に切れ目を入れられる人のことです。いわゆる「ライフ」とは、プライベートにつながります。つまり、仕事を遂行していくために欠かせない、健康維持のための睡眠と、家庭を充実させることです。これらをないがしろにせず、そのための時間を確保できる人が、仕事とプライベートを分けられる人であり、ワーク・ライフ・バランスがうまく取れている人であり、仕事ができる人であるといえます。なぜなら、仕事とプライベートを「分けられる」ということは、時間を区切る能力があるということだからです。ライフとワークを区切るという考え方ができるようになると、滅私奉公だけで終わることなく、優秀なビジネスマンになるための資質が育ちます。逆にいえば、意識的にライフとワークを区切ることができなければ、優秀なビジネスマンにはなれません。

ただし、ワークフォースとして働く人、フォロワーシップの中で働く人、つまり滅私奉公して働く必要のある人となると、残業を避けられないこともあるでしょう。だからといって「仕方がない」とあきらめないでください。その状況から解放されるように意図的に努力しなければなりません。「必要であれば残業する」という立場にあるなら、必要でない限りはきちんと定時に仕事を終えて帰るように徹底することが大切です。

「定時に帰る」という立場を周りに認めさせることができるのは、実力のある証拠でもあります。実力があり、結果を出していれば、自分の立場を望ましい形につくり上げることはできます。ひいては、「ワークとライフをできるだけ分けられる人」こそ望ましいという意識を周りに広めていくことにつながっていくはずで、仕事ができる社員ほど、仕事とプライベートをはっきり分けます。分けられないか、分けられるかは、滅私奉公型で働き続けるか、それとも一流の社員となって人の上に立つ人間に成長できるかの分岐点です。また上司としての立場からいえば、「残業することは必ずしもいいことではない」という考え方を部下に伝えていく努力をしてほしいと思います。滅私奉公し続けたまま、勤続年数が長いというだけで役職についてしまうと、「自分は昔からこれだけ残業してきたんだ」「上司が残業しているのに、部下が先に帰るとは何事か」などといったくなるものです。そういう上司は「部下も残業して当然」と考えるので、それを押しつけようとします。このような人が上に立ったら、部下にとっても会社にとっても、とても不幸なことといわざるを得ません。誰もそんなリーダーにはなりたくないはずで、

「残業しない」と決めることで、定時までその日のすべての仕事にケリをつけなければならなくなります。いわゆる「締め切り効果」が働き、効率よく集中して仕事をするようになります。「残業しない」ということは、単に時間がきたから帰るというものではないのです。これは会社にとってもそこで働く個人にとってもいいことです。この仕事の仕方を早く自分のものにしてもらいたいと思います。これまでの自分の働き方を分析して、ワークとライフの線引きが曖昧になっているようなら、まずは週一日でも二日でもいいので毎週決まった曜日に定時に帰る習慣をつけることから始めてみましょう。

「残業しない」と決めることで、どんな効果があると言っていますか？

()